

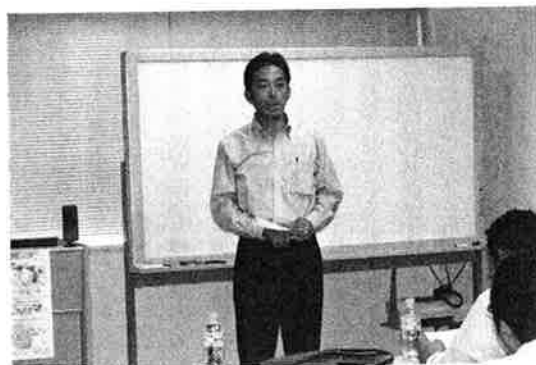
「福島から日本の未来を考える！」テーマに 日卵ヤングミーティングが研修会を開催

編集部

(社)日本卵業協会(羽井紀行会長)ヤングミーティング(松本邦義代表幹事)は9月20、21日、福島県内で「福島から日本の未来を考える！」をテーマに研修会を開催した。

20日はNPO法人チームふくしま理事長の半田真仁氏の案内による福島駅周辺の状況視察と除染情報プラザの見学、半田氏と福島県養鶏協会・レイヤー会の大垣純一氏(尙オオガキ代表取締役社長)による講演が行われた。

駅周辺の公共施設や学校、企業の玄関などには線量計が設置されてい



あいさつする松本代表幹事

る。ある企業の玄関に設置された線量計によると、当日の空間放射線量は0.44マイクロシーベルト(弊誌編集部のある東京都新宿区の9月28日の放射線量は0.047マイクロシーベルト)だった。

福島駅周辺では除染作業が進んでいるが、半田氏によると「線量計の周辺を優先的に進めている」状況だという。「完全な除染は困難で、実際には『移染』に止まっているのが現状だ。公園内の看板には「利用は、1日あたり、1時間程度としてください」の文言があり、公園を利用



除染情報プラザを見学

きない小さな子供の中には商業施設の屋内に設置された砂場が生まれて初めての砂遊びの場という子も少なくないという。

養鶏を再開するまでの軌跡

——オオガキの被害と教訓

半田氏が代表を務める採用と教育（本社福島市）の本社事務所で行われた講演会で、松本代表幹事は「福島」の状況はいろいろと見聞きするが、現地の生の声を間近に聞く機会というのにはありそうでなかった。震災から今までどうしてきたのかという生の声を聞くことができる、貴重な機会としたい」とあいさつした。

大垣氏は、東日本大震災による影響とその後について語った。(有)オオガキは双葉郡大熊町にあり、事故の起きた東京電力福島第一原子力発電所から4キロメートルの地点に位置している。自宅も農場も立ち入り禁止区域に指定されているため、大垣氏は茨城県牛久市のアパートで避難生活を続けていた。



昨年3月11日、役場の3階で確定

申告の手続きをしていた時に、このまま死ぬのかと思うほどの大変な揺れを感じた。家に戻ってみると中はメチャメチャの状態で、買ったばかりの大型テレビも割れていた。農場では16棟の餌タンクがすべて倒れていて、どこかで水道管が破裂したらしく、水圧が上がらないので水も止まってしまった。やむを得ないので、9万羽の鶏はすべて強制換羽することにした。直売所でも醤油のビンが倒れるなど、地震の被害は甚大だった。

当日の夜は強い余震が何度もあり、怖くてとても家の中にはいられないので、毛布をたくさん持って車の中で寝た。

それでも次の日には家に帰れるだろうと思っていた矢先の翌12日、原発が爆発した。原発から10キロ圏内には避難指示が出ていたので県内の温泉旅館に避難したが、そこから茨城県の牛久市に移り、今までずっと避難生活を続けていた。翌日のイベントの準備のために冷蔵庫の中には牛乳が200本ほど入っていたが、使われることもなく、今もきつとそのままの状態なのだろう。

損害賠償は、県の養鶏協会とJ A

が窓口となって東電との交渉に当たってくれた。はじめに東電側から提示された条件はとても受け入れられるようなものではなかったが、紆余曲折を経て、鳥インフルエンザ互助基金の額を基に、1羽当たり中雛550円、大雛710円、営業補償は749円が支払われることになった。

養鶏を続けられる状態ではまったくなかったが、取引先への支払いと従業員の給料は払わなければならぬ。振込みにすれば済む話だったのかもしれないが、「これが最後だから」と、せめて給料だけは手渡ししたいと思った。しかし、従業員はみな避難してバラバラに散ってしまったので、避難所を一軒一軒探して回った。息子さんが津波で流された人もいて、話を聞くのが辛かった。

今回の巨大地震と原発事故から得た教訓がいくつかある。一つは、水道のホースをできるだけ確保しておくこと。水道が止まると鶏も人間も命取りなので、ホースをたくさん確保して代替の水源から水を回せるようにしておく必要がある。

また、あれほどの非常時だと携帯電話はつながらないので、無線機な



震災の被害を語る大垣氏

どの通信機器を用意しておくこと。従業員の安否や鶏の状況がわかるように、連絡手段は確保しておいた方がいい。

もう一つは燃料で、最低でもドラム缶一本程度の軽油は準備しておきたい。実際、震災後に物流が止まった時は、エサ会社も燃料が不足すべとの農場は回れないので、軽油の備蓄があるところを優先して回っていたと聞いている。

今回の未曾有の大地震と原発事故で、自宅も農場も大変な被害を受けた。今年ちょうど50歳、あと十歳ト

シだったら、もう養鶏は辞めていた
だろう。

しかし、幸いにもいわき市に農場
を見つけたので、もう一度養鶏を始
めようと、準備をしている。ゼロか
らのスタートになるが、頑張っ
ていきたい。



大垣氏は9月末、避難先の牛久市
から農場のあるいわき市に転居し
た。早ければ今年12月にも鶏舎の建
設に着手し、1年後をメドに養鶏を



ひまわりプロジェクトを説明する半田氏

再開する見込みだという。

ひまわりプロジェクトで 雇用対策も

—半田真二氏がその意義を語る

半田氏の講演では、「福島ひまわり里親プロジェクト」が紹介された。「福島県に『復興のシンボル』としてひまわりを植えよう」という活動で、同プロジェクトが販売するひまわりの種を購入した人たちが種を育て、種を採取して福島へ送ってもらう、という運動が進められている。この作業は、震災の影響で働く場を失った知的障がい者が行っており、震災の風化対策や観光対策などとともに、「雇用対策としても重要な役割を担っている」（半田氏）。運動の輪は全国に広がり、ひまわりは今夏、県内9000カ所での花を咲かせたという。

「次世代に夢を残す」

—PPQC研究所を見学

21日は(株)PPQC研究所（本社二本松市、加藤宏光社長）を見学した。社名のPPQCとは、Poultry（養鶏）(Products (生産物) Quality (品質) Control (管理) の頭文字を取っ

たもので、同研究所は1982年に8人のスタッフで設立した。

当時はサファリパークの1キロメートル山側に事務所を構えていたため、夜中になると虎やライオンの鳴き声が聞こえたという。

洋館のような特徴的な外観の建物は、「第一印象が良くないと信用されない。人はまず他人の外見を見て、それが良かったら初めてその人間性を確認する」という加藤社長の考えによるもの。

同研究所は鶏卵を中心とした食中毒菌のチェックや養鶏生産の管理、



特徴的な外観のPPQC研究所

鶏病コントロールなどを行っており、サルモネラ検定や鮮度検定のため、契約農場から毎月5000〜7000個の鶏卵が搬入されている。

また、原発事故を受けて昨年9月からは放射性物質の調査も行っている。測定はNaIシンチレーション検出器によるガンマ線スペクトル測定で、15〜30ベクレル前後まで検出できるが、これは「自然界に存在している放射能レベルを考慮すれば、30ベクレルの測定精度があれば食品の安全性は担保できる」（加藤社長）



孵卵器を紹介する白田氏



血清の生化学検査測定器



昨年9月に導入した放射性物質検出器

ため。
研究所の見学では、弊誌連載「困つたときは、鶏に聞け！」でおなじみの白田一敏氏の調査・研究所ではさき